



民主主義への道 3

理事長 千葉忠夫

・ポール家で初めての朝食

ー紅茶袋を幾度もまわす家族たちー

デンマークの家庭で家族と一緒に初めて食べる朝食はどんなもの？ 不安ながらも期待しながら食卓についた。黒パン、食パン、コーンフレーク、バター、チーズ、ジャム。牛乳はどうやら深皿に取ったコーンフレークにかけるものらしい。コーヒーカップがあったがこの家庭では朝は紅茶を飲むようである。

驚いたことに、一つの紅茶袋を家族で回し、紅茶の色が出なくなるくらいまで何度も使うのであった。私はいつも最後に使うように心掛けた。多少色の残っている白湯に砂糖を入れて飲むので砂糖湯を飲んでいようなものであった。

食べ物は何かから食べるのかと見ていると最初は深皿で、後で分かったことなのだがコーンフレーク、オートミール、黒パンのお粥など、毎朝違ったものを食べ、その後に黒パン、最後に食パンを食べるようであった。

私は主人のポールの食べ方を真似してワンテンポずらして同じものを食べるようにしたら子供達がおかしそうに注目していた。それにしてもライ麦の黒パンなんて今まで食べたことがなかったのでうまくない事！一切れをなんとか飲み込み、ポールが食パンを取るのを待った。

食パンの食べ方という、パンの食文化で育っていない日本人の私は普通バターかジャムを付けるだけで食べるのが当たり前と思っていた。なんと食パンの上にバターを塗り、その上にチーズを乗せ、さらにその上にジャムを付けて食べるのである。変な食べ方もあるもんだと思ったが、真似をするより他にない、しかしこれは美味しかった。以後しばらくの間朝食は食パンばかり食べていたら家族の目が気になりだした。それに朝仕事の後の空腹を食パンだけでは補えなくなり、努めて黒パンも食べるようにした。

デンマーク人の主食である黒パンは実に美味しい。玄米ご飯と同じなのだ。しかし、現在短期研修で来ている日本の客人の口にはほとんど合わないのである。そんな時、ふっとデンマークに来た当初の自分を思い出すのであった。

・さっそく乗ったトラクター

ー地平線まで一直線に耕すー

朝食が終わるとポールがまた「ついて来い」という。農機具の格納庫である。飛行機の格納庫は見たことがあるけど、こんなにでかい農機具があるとは。内心驚いていると、タイヤだけでも自分の背丈以上ある大型トラクターに「一緒に乗れ、俺の操作方法を見て、これからじゃがいもを蒔く畑を耕作しに行く」と言っているらしい。それがなぜ分かったかという、落ちていたじゃがいもを指さし盛んにデンマーク語で繰り返してくれたからだ。「カタフラア」「カタフラア」と聞こえた。最初私には「肩振れ」と聞こえ、そっと自分の肩に目をやったものか？

地平線まで行って丸い地球から落ちこちるんじゃないかと思うくらい広い畑を耕すのだ。しかも一度になんと六畝くらい掘り起こしていく馬力をもったトラクターで進むのだ。2、3往復するとポールはエンジンを止め、また落ちていたじゃがいもを指差した。「日本語ではなんと言う？」とたぶん聞いたので、「いも」と答えたら、「イモ、イモ」と何度も繰り返した後、「今度はお前がイモ畑を耕せ」と言っている。

「エーッ！」。小さい飛行機は何度か操ったことがあるけど、こんな馬鹿でかいトラクターをと不安だった。幸い大型免許を持っていたのでハンドルを握り、ファーストギアに入ると巨体は6行の畝を引っ掻きながら動きだした。地平線まで一直線に起こすのはさすがに難しく、畝はぐねぐねと見事に曲がってしまった。折り返しに修正しながら戻って来たので12行の畝を作るところを6行しか出来なかった始末。ポールにとって私は半人前の小作人だったわけだ。

でも給料を欲しいと言ってなかったのが大目に見てくれた。私としては給料をもらうよりも何よりも食べ物と寝るところの確保の方が至上命令だったからだ。ポールの優しさが嬉しくて、首にならないように半人前の仕事ながら2倍の時間をかけてやっつてやれと覚悟した。

・昼食ーじゃがいも、豚の焼肉、茶色のソースー

12時を過ぎても私は広い畑を歩き来していた。遠くでマーキッドが手を振っているのが見えたので近くまで行ってエンジンを止めると「お昼だヨ」と言っているようだ。お昼の食卓がまた興味津々。丸ごとゆでたじゃがいも、豚の焼肉、茶色いソースだけである。足りない味付けは塩と胡椒を自分で振りかけるらしい。野菜をあまり食べず脂肪分の多い食生活なのに当時日本人より平均寿命が長いのはなぜ

だろうと思った。どうやらじゃがいもに大量のビタミンCが含まれているらしい。

子供達がまだ学校に行っていないので、昼食もポール、マリア、マーキット、カステン、私とでテーブルを囲むことになる。一番末のヘンリックは揺りかごの中だ。最初の昼食で子供達は「シイオ」、「コオショウ」と私から聞き出した言葉にアクセントを付けて口にしていた。私は全神経を目と耳に集中して彼らが喋るデンマーク語と動作を関連させ、何を言っているのか理解するようにした。

デザートはイチゴをどろどろと煮たようなものに牛乳をかけて大きじで食べる。ジャムを牛乳で溶かして食べているみたいであった。

・いつも空腹。15分の昼寝でよみがえった活気。夕方ポールは誉めてくれた。

とにかく何を食べても空腹のときはうまい。肉体労働を長いことしていなかった私の身体はいつも空腹を訴えていたのだった。もう一つ空腹になる理由があった。どの食事でも主人のポールより多く食べてはいけないと自分で決めていたからだ。主人より多く食べ過ぎて穀潰しと思われ、首になるのが恐かったからである。

ポールは昼食を終えると昼寝をするのが習慣で私にも勧めてくれたが、勧められる前からすでに睡魔が襲っていたのだ。居間のソファに横になるとたちまち眠りに引きずり込まれた。わずか15分ばかりのお昼寝で活気がよみがえったのである。

「午後からもトラクターで同じ仕事をやれ」と言われたのだと思った。「トラクター」という単語を耳にしたからだ。「Ja、ヤア」と答えて果てしなく広い畑に出る頃にはギアチェンジも上手くなりちょっとばかり良い気分であった。畑を一直線に切るようにして耕作を開始するとカモメが数十羽掘り返したばかりの土についている虫を漁った。その数があつという間に何百羽と増えたりして、ヒッチコックの映画を思い出したりした。

三時ごろ、遠くに人影を発見。後ろにカモメを従えながら近付いていくとマーキットが手提げかごを持って佇んでいた。「ンッ?」。彼女は手提げかごの中を指差す。おやつを持って来てくれたのである。エンジンをストップして土手の草むらに並んで腰掛け、コーヒーとケーキを食べる。コーヒーを飲まない彼女はソーダ水の瓶を口にした。そばの草むらからヒバリが思いっきり空に舞い上がっていった。なんとなく幸せな気持ちになったのはなぜだったのだろう。10分ばかり休み、彼女に「Tak、タック」というとにこりと微笑して手提げかごを持って家に引き返していった。

午後5時過ぎころ、ポールが「もうやめろ」と

手を振っているのを見つけ、カモメの家来どもを連れて引き返すと「なかなか上手いじゃないか!」と誉めてくれたんだと思う。なぜなら午前中にグニャグニャした畝を作ったとき見せた顔と違ってニコニコしながら言ってくれたからだ。

・入浴で失敗。夕食はいつもオープンサンドイッチ

シャワーを浴びろと言われたが、私は家族が入るふろ場ではなく、蜘蛛の巣が張った地下室の薄暗いところにあるふろ場だった。バスタブがあったのでお湯をたっぷり満たして一日の疲れを癒し、良い気分が上がってくると、家族が使うお湯が無くなったと言われ、この家では使う湯も節約しているんだなと、「ごめんなさい、今後気を付けます!」。豊かな暮らしを築いている何かを垣間見た気がした。

終日畑を耕し、土ぼこりで真っ黒になった身体を浄めると、空腹が夕食は何だろうと興味をそそった。今日の夕食を食べるとデンマークの家庭での丸一日の食事のパターンがつかめるわけである。

食卓には主食の黒パン、色々な種類のハム、レバーペースト、お昼の残りの焼肉、ゆで卵、生タマネギの千切り etc. 食べ方は黒パンにバターを塗り、その上に自分の好きな具を乗せて食べる方式で、日本ではオープンサンドイッチと呼んでいるものだ。

主食であるご飯の上に自分の好きな具を乗せて食べるのを日本では「寿司」と呼ぶ。それなら、主食の黒パンに自分の好きな具を乗せて食べるオープンサンドイッチはデンマークの「寿司」ということになるのかな。毎日夕食はオープンサンドイッチと分かったので、毎日デンマークの寿司を食べられることになったと自分を慰めた。

実は、日本にいた時の私は、米の飯を食べないと食事をしたとは腹でも頭でも認めなかった人間だったから、家族の者がお前は外国では生きていけないよと言っていたのを思い出した。

夕食中にふっと思い出して「豚どもの夕食は?」と豚の真似をして聞くと、ポールが「自分がやった」と答えた。豚は一日二食だけだということを知った。デンマークの養豚営農は世界一である。彼らはランドレースという胴長で肉付きのいい豚の品種改良に成功したのだ。日本との貿易収支は世界中ほとんどの国が赤字であるがEU圏内ではデンマークがイタリアとともに黒字だ。これも、この豚によるところが大きいといっても過言ではない。私が育てた豚を皆さんの誰かが既に食べたかもしれない。

この手記は月刊「権利闘争」（権利問題研究会発行）にて連載されたものです。転載の許可をいただきました関係者の方々に感謝いたします。

住みよい幸せな国づくりのヒントを探して

仙台大学客員研究員 高橋まゆみ
(デンマーク在住)

【第三話 デンマーク人の働き方と

休暇の過ごし方】

デンマークに移住し約一年になります。日本からデンマークに研修に来られる方々とお会いする機会もあり、質問を受けるたびに改めて日本とデンマークの生活の違いを考えるチャンスに恵まれます。例えば「幸せな国といわれるデンマークに住んで、幸せですか？」という質問を受けます。私は「何かしらゆとりを感じながら生活しています」と答えることがあります。その後で、それはどんなゆとりでどのような環境からくるものなのだろうかと自問自答します。デンマーク人の働き方、余暇の過ごし方、休暇の取り方などから一つのヒントを探ることができます。

デンマークの法定労働時間は週 37 時間（一日平均 7.4 時間）です。職種にもよりますが、通常月曜日から木曜日は 8 時に出勤し 16 時に退社、金曜日は 13 時までという勤務体制になっています。残業や休日出勤はほとんどなく、フレックスタイム制を有効に活用しています。また、デンマークでは、年間で約 5 週間の有給休暇が認められています。すべての人が有給休暇をほぼ 100%消化することを聞き、日本の有給休暇取得率が 50%に満たない現実とのあまりの違いに驚きます。実際にデンマーク人の生活を見ていると、人間の生活条件に適った時間を無駄にせずに「仕事・余暇・睡眠の時間」を 24 時間の中で上手に使い分けていることを感じます。特に、夏は日照時間が長いために 22 時ごろまで明るく、仕事が終わった後にスポーツジムに通う、ジョギングをする、友人たちとのパーティを楽しむ、ダンスパーティに行く、さらにはガーデニングに時間を使うなど様々な楽しみ方をしています。余暇活動については、「余暇・社会文化活動法 (Folkeoplysningsloven)」(1990 年公布、2011 年改正) の制度により、文化・スポーツなどの余暇活動の財政的保障等を定めており、市民が余暇活動へ参加しやすい環境を整えていることも大きな存在として挙げられます。

そんなデンマーク人は、2～3 週間程度の夏休みを連続で取るのが普通になっており、その休暇の過ごし方もさまざまです。海外旅行へ行く人々、サマーハウスで過ごす人々、キャンピングカーで 400 近くある島のどこかで過ごす人々、さらには大学やフォルケホイスコーレの

サマーコース（1～2 週間）を受講する人々など、自分たちに合った過ごし方で休暇を満喫しています。フォルケホイスコーレのサマーコースは、ファミリーで過ごすコース、芸術、演劇、語学、カヤック、島々を歩く (Øvandringkursus) コースなど様々あり充実しています。受講料は平均 4,600dkr/週（約 8 万円程度）で、学校の宿泊施設と一緒に宿泊しながら受講内容と同時に、食事、パーティ、コンサートを通してコミュニケーションを図り楽しめます。この夏、フォルケホイスコーレの島々を歩くコースの一部に参加させていただきました。5 つの島々を 5 日間（1 日 1 島、平均 8～10km）で歩きました。美しい景色、野生のシカの群れや珍しい鳥の姿をみることができ素晴らしい経験ができました。今回参加したコースの受講者（40 人）の中には、70 歳代～80 歳代の高齢



ÆBEL 島に向かって歩く親子

の人もいましたが、みんなとても元気で健康的なのが印象的でした。歩きながら島々の歴史を学び、自然の様子を観察し、リンゴ

農園を訪ね自然環境を学ぶなど、自然に触れながらゆったりとした気分になりました。



STRYN 島のフルーツガーデンで話を聞く受講者

一人で過ごすよりは誰かと一緒に過ごせる方が楽しいと思えるし、安心して過ごせるのかもしれない。休暇をしっかりと過ごした後は、また仕事

に戻り休暇の出来事を語り合い、そこから新しいアイデアを生み出しながら生産性を高めていく。これがゆとりあるデンマーク流の働き方と休暇の過ごし方のバランスなのかもしれません。

【お詫び】 18 号の第二話の末尾 15 行分『心で住みよい』とは答えられません。……以前、習った言葉が頭を巡ります。』は、第一話の文章を再録してしまったもので、編集上の誤りでした。高橋さんと読者の皆様にお詫び申し上げます。

鹿児島研修塾に参加して

木村仙理

私は、2016年の4月からの3ヵ月 Nordfyns Højskole に在学していました。今は、障がい者授産施設で生活支援員をしています。

Nordfyns Højskole の授業で、今までの福祉に対する考え方を一変させられました。帰国してからすぐに就職を控えていた私は、デンマークで培った「こんな支援者になりたい」という理想像を胸に働き始めました。ですが、実際に働いてみると理想と現実のギャップは大きく、理想としていた支援はなかなか行えませんでした。そして毎日の業務をこなすのに精一杯になり、自分の中にあった理想とはかけ離れていきました。

その為、帰国直後のあの気持ちを取り戻したく今回の研修塾に参加させてもらいました。

今回の研修塾では森田洋之先生の「破綻からの奇蹟～いま夕張市民から学ぶこと～」のお話しをはじめ、多くの方の講演を聞くことができました。

夕張市の現状についての知識が何もない自分でも、森田先生のととてもわかりやすい説明で夕張市の医療システムについて知ることができました。

夕張市で起きた財政破綻から発生した医療崩壊。夕張市民はどう乗り切ったのかについてのお話しは大変興味深いものでした。このお話しでのキーポイント、「病院いらずでも元気に暮らせる3つの秘密」。病院依存をしてしまっている現状を打破するために行うべき医療や、予防。今後私たちが進んで行くべき方向を分かりやすく知ることができる講演でした。

翌日の千葉さんの講演中では、真の民主主義という言葉に深く考えるものがありました。

「民主主義」私はこの言葉を表面上でしか理解できていませんでした。今も理解しきれていないのかもしれませんが、民主主義のお話しを聴いて、「選挙」の重要性について再認識をすることができました。投票率が下がっている世の中で国民に自分たちの生活を保障してくれる議員を見定めること、「選挙」の重要性を伝えることが今後の課題の1つになってくのではないだろうかと感じました。私も20歳になっていきなり選挙権を手に入れましたが、正直言って、政治の世界も選挙の仕組みも曖昧でした。何より選挙がどんなに大切なことなのか、その本当の意味を理解できていませんでした。そんな人は多いのではないのでしょうか。幼い頃から選挙・政治についてもっと教育していくことが必要だと感じました。そして必ず投票に行き、自分の主権を行使することが望まれるのではないのでしょうか。

話を研修塾に戻します。

夜には、グループワークが行われました。グループワークでは、「安心して生きられる社会」とは何なのかというテーマで行われました。それぞれのグループ、重なる点もいくつかありながらもさまざまな回答が上がっていました。回答が出そろった際に感じたことは、今回のグループワークで出た回答をどのようにして実現するのか、それが私にはピンと来ませんでした。今の私にできることは何なのだろう。

今までみたく他人事かのように目を背けていられた時代では無くなってきていると感じています。ですから、今自分たちができることを今回グループワークで出た結果を参考に、また多くの人と話し合いたいと思いました。

[編集部から]森田洋之氏、千葉忠夫氏、アンニャ・ロン・クリステンセン氏の講演概要、写真は次号以降に掲載します。第8回研修塾は来年の秋に福島で開催します。

編集後記 ★盛況だった研修塾。鹿児島の方々の努力に深謝。
★事務局からのお知らせが載せられない紙面、これも新鮮か。
★今夏から18歳選挙権が実現したが、投票率は期待より低かった。
★若い木村さんの文章が我が国の主権者教育の現状と課題を改めて教えてくれる。
★自衛官や警察官、海上保安庁職員に敬意と感謝を表す拍手を国会の場で党員に指示して行うのは全体主義への一歩ではないか。
★祖国かなし枯木の羅列風が鳴る(巨泉)感謝と敬意の対象がいつの日か「枯木」にされないためにも長い物に巻かれない主権者教育が求められる。(茂木)

発行所

〒292-0801

千葉県木更津市請西4-6-9

Tel: 0438-36-3565

お問合せTel: 090-9827-9262

茂木俊郎

NPO法人ホームページ

<http://www.djsli.com>

メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。

